

niponica

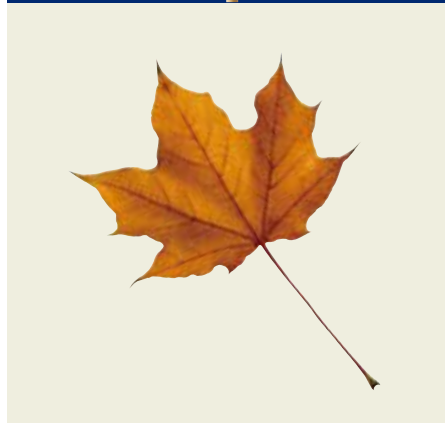
Discovering Japan
2016

no. 19

にほにか

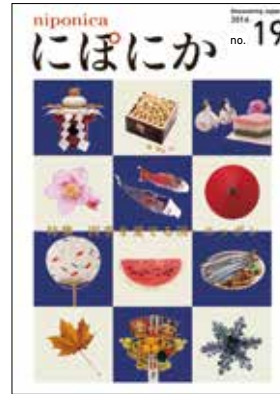


特集 四季を愛でる国 ニッポン



日本語で「日本」を表す音「にっぽん(nippon)」をもとに名づけられた「にぽにか(niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。

日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。



表紙：四季折々の伝統的な出来事や風物を
1月から12月までの順に紹介
(写真=アマナイメーجز・PIXTA)

目次

特集 四季を愛でる国 ニッポン

- 04 四季の移ろい
 - 08 日本の四季と美術
 - 12 華やかに四季を彩る
ショーウィンドウたち
 - 14 四季と共存する
先進の省エネルギー住宅
 - 18 日本の四季 花を巡る旅
-
- 22 召し上がれ、日本 季節のおやつ
 - 24 街歩きにっぽん 札幌
 - 28 ニッポンみやげ 手ぬぐい



写真：アフロ



no.19 2016 年 9 月 14 日発行

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関 2-2-1
<http://www.mofa.go.jp/>

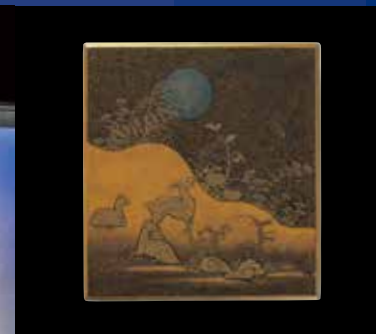
特集

四季を愛でる国 ニッポン

日本は、四季の変化に富む自然豊かな国です。

古くからその季節の移ろいを感じ取り、自然の恵みを尊んできました。

今なお息づく「四季を愛でる」心を日本全国にさがしに行きます。





四季の 移ろい

写真：丹地保堯

はる 春は「はじまり」の季節である。

がっこう 学校でも、かいしゃ 会社でも、あたらしい 年度がスタートするのは4月。

はる 春になり、いのち 命がめ 吹き、はな 花が咲くと、

あたらしい 新しいはじまりに、だいち 大地はよろこ びに満ち、

ひとびと 人々にもよろこ びの気持ちがあふれる。



月に酔う

春

万葉の昔から、心のよりどころとして歌に詠み継がれてきた「桜」。
樹の下で集う「花見」や「観桜」も、今日まで日本人に受け継がれてきた大切な慣習である。
夜の妖しい桜を愛し、その散り際も愛でる――。
それもまた、桜に特別な思いを寄せる独特の感性なのかもしれない。



光に遊ぶ

雨の季節が終わると、
キラキラと太陽が降りそそぐ夏がやってくる。
気温が上がり、湿度の高い夏には、その季節ならではの楽しみも多い。
美しい砂浜での海遊び、登山客を待ち受けている山々、
そして、風物詩の花火大会や夏祭り。
人々の心に残る思い出はつきない。

夏



秋

真っ赤に色づくモミジやカエデ、黄色のイチョウ。
紅葉する多種多様な草木が交じり合って繰り広げられる風景も
一つとして同じものはない。
古くから「紅葉狩り」と称して、山に野にと足を延ばし、
赤く染まった木々に想いを寄せる。

彩に踊る



雪に舞う

寒い冬が近づくと、あちこちから、鶴の便りが届く。
極寒の地から飛来し、日本で越冬、
そして、春になると繁殖地へ帰っていく。
白い雪の大地に立つ鶴の端正な姿は、古くから愛されてきた。
タンチョウの学名、Grus japonensis は「日本産の鶴」という意味である。

冬



日本の四季と美術

文：根津美術館 学芸課長 野口剛
写真：根津美術館

四季花鳥図屏風 伝狩野元信筆 日本・室町時代 16世紀 根津美術館蔵



四季と日本の文化

1年ごとの気候の変化は、地球上のあらゆる場所で起こります。しかし、中緯度に位置し、かつ海洋や大陸で発生する気団の影響を受けやすい日本は、春夏秋冬の四季の変化がとくに明瞭で、折々の自然の風物が豊富に備わっています。

そんな風土を背景とする日本の文化は自ずと、季節の変化を鋭敏に反映するものとなりました。

2013年にユネスコの世界無形文化遺産に登録された和食にもそれは当てはまりますが、他にもたとえば和歌があげられます。そのことは、平安時代の905年に成立した『古今和歌集』以来、和歌集の冒頭で春夏秋冬に分けて和歌が配列されるところにも象徴的に示されています。



薄(すすき)に鶉(うずら)図 尾形乾山筆 日本・江戸時代 寛保3年(1743) 根津美術館蔵



四季絵と月次絵

美術においても、四季は大切なテーマとなりました。『古今和歌集』が成立したのと同じ年、「四季の絵」を描く屏風が制作されたことが記録からわかります。折しも日本の題材を描く「やまと絵」が、中国の題材を描く「唐絵」と対比されるかたちで誕生した時期にもあたります。以降、平安時代のやまと絵屏風では「四季絵」、そして12か月の行事や風物を描く「月次絵」が主要な画題となりました。

鎌倉時代の初め、1214年に公家で歌人の藤原定家は、絵に描くための12か月の花と鳥を主題

とする和歌を詠みました。それは平安時代の月次絵の伝統に立つものでしたが、後に江戸時代になると王朝文化への憧れのもと、この定家の詠んだ和歌に基づく「十二ヵ月花鳥図」が大流行します。

尾形乾山「薄に鶉図」は、もとは12枚セットでアルバムに貼られていた「十二ヵ月花鳥図」のうち9月にあたります。本業は陶芸家であった乾山の素朴な筆さばきが、秋の枯れた風情をよく表現しています。



工芸意匠に息づく季節

やまと絵の季節表現は、工芸品にも受け継がれます。蒔絵の硯箱を見てみましょう。

まず蓋の表。満月を背景に、秋草が群れる小山に三頭の鹿がひそんでいます。一方、蓋の裏には茅葺の家で男が一人、外を眺める様子が表されています。よく見ると、モチーフの中にいくつかの



文字が隠されており、それによって、この硯箱が『古今和歌集』に収められる「山里は秋こそことにわびしけれ 鹿の鳴く音に目を覚ましつ」という和歌に基づくことが知られます。雌を求めて鳴く雄の鹿の声に人の心の寂しさを重ねて深まる秋を表現した意匠なのです。

重要文化財 藤花（ふじはな）図屏風 円山応挙筆 日本・江戸時代 安永5年(1776) 根津美術館蔵



屏風に描かれた季節

平安時代に四季絵や月次絵の舞台となった屏風はその後、大画面絵画として発展を遂げ、視覚的な効果が一層追求されることとなりますが、ここでも季節の表現は大切にされました。一統きの地形に春から冬までの四季が移り変わる花鳥図屏風や山水図屏風が数多く制作されています。

四季の中でも春と秋は日本でとくに好まれる季節です。「吉野龍田図屏風」は、右の画面には爛漫の桜、左には紅葉した楓を描いています。作品名は奈良県に位置する桜と紅葉の名所に由来し

ますが、春秋の鮮やかな対比が作品の見どころであるのも間違いありません。画中には桜と紅葉を詠った和歌を書いた短冊が描かれています。季節を言祝ぐ江戸時代のやまと絵屏風です。

もう一点、18世紀の京都で活躍した円山応挙の「藤花図屏風」を紹介しします。作品の眼目は西洋の印象派を思わせる斬新な絵画表現にありますが、同時に、屏風を広げれば藤の花咲く初夏の息吹が溢れ出てきます。日本で長く培われた季節感に対する鋭い感性が備わっています。



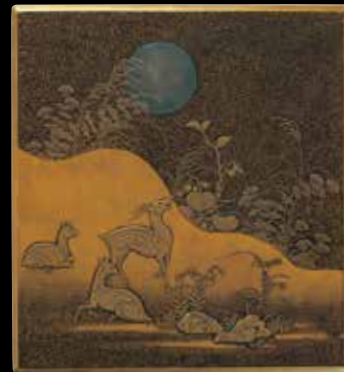
吉野（よしの）龍田（たつた）図屏風 日本・江戸時代 17世紀 根津美術館蔵



日本美術の四季と和歌

こうして見てくると、日本美術における四季の表現は、和歌と密接に関わっていることがうかがわれます。季節の風物を単に自然現象として受けとめるのではなく、和歌がそれを媒介して形や色が与えられるのです。

やはり日本の美しい自然を指す「花鳥風月」という言葉は、自然を愛でる風流な心の意味ももっています。そうした文学的な情緒が、日本美術における四季表現の優美さの源になっているのではないのでしょうか。



表



裏

重要文化財 春日山（かすがやま）蒔絵硯箱 日本・室町時代 15世紀 根津美術館蔵

野口 剛（のぐち たけし）

根津美術館 学芸課長



1966年生まれ。東京大学大学院美術史学専攻修士課程を修了。京都文化博物館に勤務の後、2008年から現職。専門は日本の近世絵画史。とくに京都の狩野派や琳派、円山応挙をはじめとする18世紀後半の京都画壇について研究している。

はなやかに
四季を彩る

ショーウィンドウ たち

MIKIMOTO



ミキモト (2012年秋)
日本の象徴富士山を、赤く色づくペーパークラフトの紅葉で作りあげた。ガラスの水面に浮かぶモミジの葉に一粒のパール。遠景からの美しさに続き、近付くにつれ見えてくる繊細なクラフトに小さな宝石。見事な秋の世界が広がる。
※ミキモト本店は 2016年9月時点で建て替え中です。



Tradition



松屋銀座 (2015年夏)
浴衣は夏の風物詩。
涼を誘うディスプレイ
がいいね！



資生堂銀座ビル (2016年春)
石庭を思わせる日本庭園におかれた屏風にうつされているのは風にゆれる草木の姿だ。日本の伝統的なモチーフで構成されながら不思議な現代性を感じる。



日本橋高島屋 (2014年秋)

ショーウィンドウは、日本の「今」を見せてくれる鏡のようだ。
伝統的な美意識の中にのぞく意外な現代性。
無国籍なモダンアートが語る東京の物語。
マンガやアニメのモチーフは日本の古い神様たちだ。
古いもの、新しいもの、ポップなもの、全てが融合されて、
驚きの演出、鮮やかな色使いで街行く人たちの視線をとらえる。
同じショーウィンドウには二度と出会えない。
街を彩る季節の一期一会。それが日本のショーウィンドウたち。

万華鏡をテーマに
クリスタルの冬の
森を表現！



Contemporary



伊勢丹新宿本店 (2016年春)



銀座・和光 (2014年冬)
煌めきにあふれるクリスマスのギンザ。フクロウの
眼をイメージしたオブジェを覗き込むとその一つ
ひとつにも物語が込められている。



伊勢丹新宿本店 (2016年春)



日本橋高島屋 (2016年夏)



伊勢丹新宿本店 (2016年冬)
モチーフの「だるま (禅宗を開いた達磨大師が座禅
した姿に作った置物)」は日本のお正月に欠かせな
い縁起物だ。

Pop Culture

人の集まるお正月の
楽しさを、ポップな
キャラクターで表現
しているね。



Show Window!

四季と共存する先進の省エネルギー住宅

—— 昔ながらの日本家屋の知恵を、LCCM 住宅に織り込む ——

写真：楠聖子・アマナイメーجز・PIXTA 協力：国立研究開発法人建築研究所・小泉アトリエ



14頁：茨城県つくば市国立研究開発法人建築研究所内にある LCCM 住宅デモンストレーション棟／
15頁左：特徴の一つである可動スクリーン(写真＝楠聖子)

家を建て、暮らし、最終的に取り壊すまでの二酸化炭素の収支がマイナスになる住宅をライフサイクルカーボンマイナス (LCCM) 住宅という。日本家屋の伝統的な考え方を生かしながら LCCM の実現を目指すのが、このデモンストレーション棟だ。



国立研究開発法人建築研究所上席研究員の桑沢保夫さん。LCCM 住宅デモンストレーション棟では、エネルギー消費量に関する設計と計算を担当した。[計算では、30 年以内に CO₂ の収支がマイナスになる]と桑沢さん。

エネルギー消費量や CO₂(二酸化炭素)排出量の削減は、日本の家づくりにおいても解決すべき重要なテーマだ。茨城県つくば市に建つ実験住宅「LCCM 住宅デモンストレーション棟」では、太陽光発電や蓄電池をはじめとする先進の設備機器を備え付けて、エネルギーの創造と消費エネルギーの削減を行っている。

とはいえ、たくさんの設備機器を設置しただけの住宅ではない。あえて人の手を使い、自分たちで調節しながら、自然と上手に付き合っていく住まいの在り方を提案しているのが特徴だ。

ここでは、引き戸やブラインドをはじめとする可動スクリーンを省エネルギー化に活用する。「季節や天気に合わせて

て住み手が建具を開け閉めし、その時々々に快適な室内環境を生み出していく。あたかも建物衣替えるようにして四季の変化に対応する手法には、日本の伝統的な暮らしの知恵が生かされている」。建物の計画に参加した建築研究所上席研究員の桑沢保夫さんはそう話す。

昔ながらの日本家屋では、縁側越しに室内と屋外がつながっている間取りがよく見られる。大きな間戸(柱と柱の間にある開口部)を通して外の風景を楽しみ、心地良い風を室内に取り込む。障子や雨戸を開け閉めして、光や風雨が入ってくるのを制御する…。このように日本人は、四季の変化を積極的に受け入れながら日々の生活を営んできた。

「衣替え」を取り入れた LCCM 住宅デモンストレーション棟でも、光や風と折りあいながら暮らそうとする姿勢は変わらない。ここに、日本らしい省エネ住宅の姿がある。

緩やかなつながりを楽しむ
日本の家屋



(写真＝アマナイメーجز)

POINT 1 衣を重ねる

雨風を防ぐための雨戸や、障子や襖(ふすま)といった建具の衣を重ねて、室内環境を調整。(写真＝PIXTA)



POINT 2 空間を分ける



障子や襖を開けて自在に空間を分割することも可能だ。(写真＝PIXTA)

POINT 3 風を通す

春から秋にかけては建具を開け放して風を招き入れる。(写真＝PIXTA)



季節に合わせた「衣替え」の手法

POINT 1 衣を重ねる



何層にも重ねた可動のスクリーンは、それぞれ異なる機能を持つ。
例えば冬の昼間は、窓ガラスのスクリーンを全て開ける。穏やかな日差しを取り入れ、縁側の黒いタイルに熱を蓄えるためだ。夜は断熱スクリーンを下ろして、暖かい空気を閉じ込める。夏には木製ルーバーを閉めて、強烈な日差しが差し込むのを防ぐ。
細い木材を並べたルーバーや、柔らかな光を透過する素材で構成されたスクリーンは、格子戸や障子などに通じる日本的な美を備えている。

左：縁側の両側に複数のスクリーンが並び、窓沿いに断熱スクリーンと可動式木製ルーバー、リビングとの間に縦格子のガラス戸を設置／右：断熱スクリーンは、熱を逃さないように二層のハニカム構造になっている(写真＝楠聖子)



POINT 2 空間を分ける

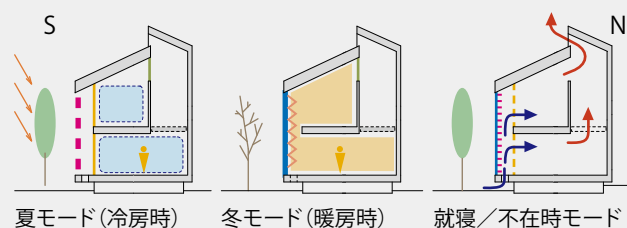
上：2階の寝室はスクリーンを下げると落ち着いた環境の「就寝モード」に切り替わる／下：連続した空間を引き戸で区切ることができる(写真＝楠聖子)



障子や襖の開け閉めで、空間を分けて暮らす伝統的な日本家屋のように、この住宅でも可動間仕切りによって、空間を多彩に有効利用している。

空間分割は、省エネルギー化にも一役かっている。間仕切りを閉めると冷暖房を効かせる空間が小さくなり、エネルギーの消費量が少なくて済む。縁側とリビングの間仕切りは、夏に閉じると熱くなった縁側の空気を遮断でき、冬は開け放しにすると縁側の暖かさをリビングに呼び込める仕組みだ。

● 季節と時間のモード図 (提供＝小泉アトリエ)



住み手が多様なスクリーンを動かして、季節ごとに居住環境を整える。
LCCM 住宅デモンストレーション棟には、日本の伝統的な考え方を生かした仕組みがちりばめられている。

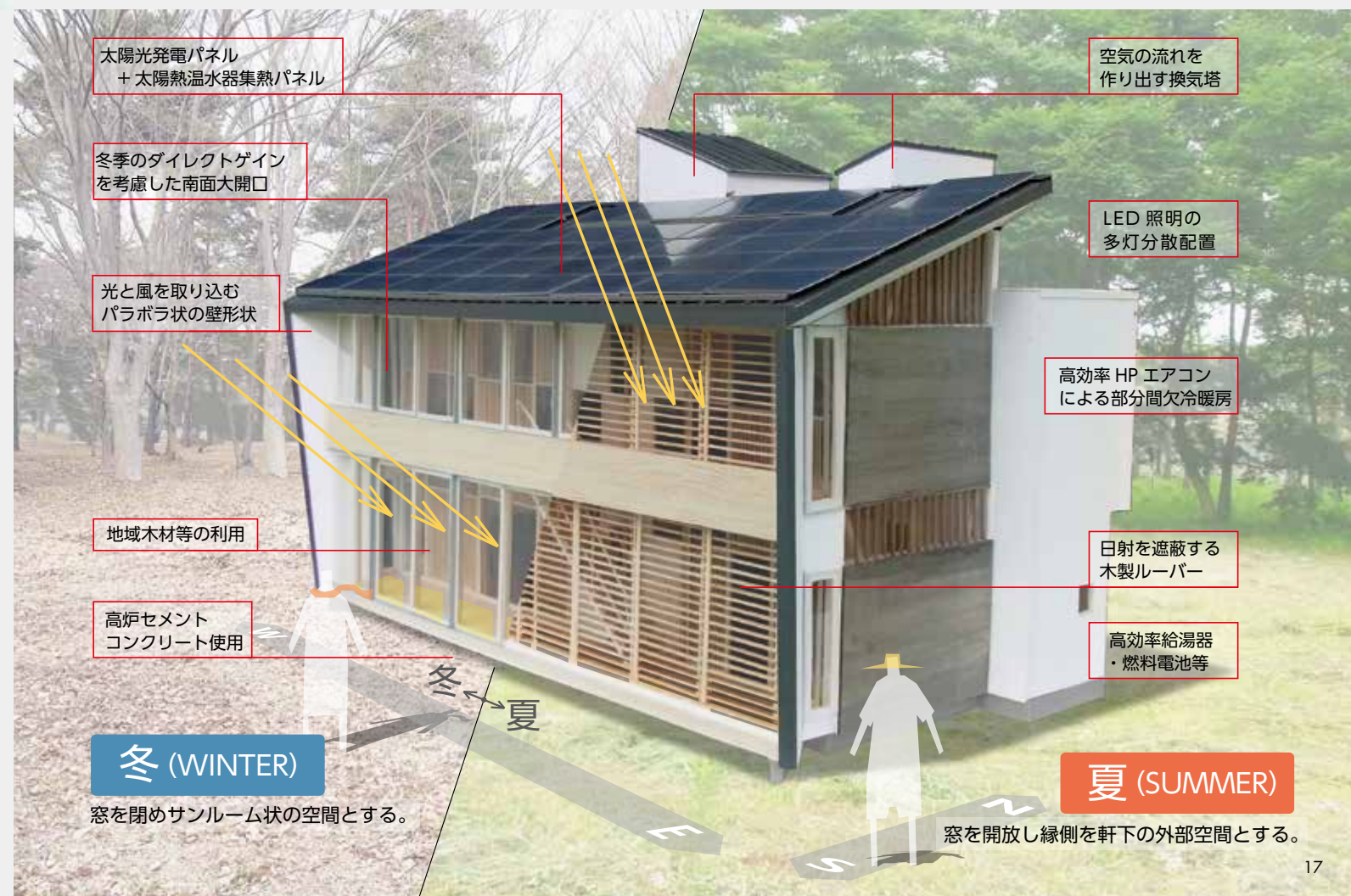
POINT 3 風を通す



春や秋には、心地良い空気を積極的に室内に取り入れる。
建物の東西に設けた窓は、春や秋によく吹く風が入りやすい向きに開く。縁側の床タイルを外して取り替え式の格子をはめると、地面を吹き抜ける涼風の取り込み口となる。
外から取り入れた空気は、吹き抜けを通して換気塔から屋根の外へと流れ出る。屋根は風を誘発する形状に仕上がっている。建物全体が、効果的な通風を生み出す装置になっているのだ。

左：東西方向からの風の取り入れ口となる縁側両端の窓。より多くの風を取り込めるように壁に角度を設けている／右上：床下から風が入るよう縁側の床につくられた取り替え式の格子／右下：玄関上の換気塔。暖かい空気を閉じ込めたい時は手動のスクリーンを閉める(写真＝楠聖子)

LCCM 住宅デモンストレーション棟／デザインコンセプト (提供＝小泉アトリエ)





写真：アマナイメーجز

日本の四季 花を巡る旅

文：佐佐木幸綱

万葉集の花

八世紀に編集された日本最古の和歌の詞華集『万葉集』には、約4,500首の和歌がおさめられています。その約3分の1、1,500首ほどに植物の名前が出てきます。植物だらけと言っているでしょう。季節の歌にはもちろんのこと、相聞歌(恋の歌)、挽歌(人が死んだ時の歌)、旅の歌、お祝い歌、どんな歌にも植物名が出てきます。

しかも、たくさんの種類が出てきます。『万葉集』に登場する植物名は約160種類。その中で花は50種ほど。現在の私たちでも、160種類もの植物名や、50種類もの花の名前をすぐに言える人は少ないと思います。これほど多くの植物名や花の名前が出てくる詩の詞華集は、世界中さがしても他にないでしょう。

なぜなのでしょう。日本は四季の区別がはっきりしているのです。春にはいっせいに新芽や若葉が、秋にはあざやかな紅葉が見られます。さらに季節ごとに多くの種類の花が咲きます。そんな背景があって、生け花や花の模様の着物を着たりもして花と親しんできました。

日本には季節をうたう和歌というジャンルが昔からあって、何人かの人が集まって、春には春の和歌を作って楽しむ風習がありました。その時の和歌には、梅とか桜といった具体的な花の名を入れるのがふつうでした。そんな風習があって、日本人は植物や花の名前を具体的におぼえるのが得意になったようです。

さらに、人に物を贈るときに、花とその花をうたった和歌を添えたりもしました。そんなことから、しぜんに花の歌が多くなり、うたわれる花の種類も多くなったのだらうと思われます。

『万葉集』に一番多く出てくる花は、秋に咲く萩です。約140首に出ています。次に多いのは春に咲く梅です。梅は、万葉集の時代に輸入された新しい花で、貴族階級に人気の花でした。約120首。その次に、橘、桜とつづきます。

面白いことに、萩も梅も橘も桜もみな小さな花です。古代日本語に「くわし」という褒め言葉がありました。小さいものを美しいと感じたようで、上位の花はみな小さい。面白い感じ方ですね。

さて、せっかくですから一首だけ、桜の花の歌を紹介しておきましょう。

藤原朝臣広嗣、桜花を娘子に贈る歌

この花の一節のうちに百種の
言ぞ隠れるおほろかにすな

(この花の一枝の中には、私が言いたいたくさんの言葉や
思いがこもっています。おろそかに思ってくださいな)

恋の歌です。詞書にあるように、男性が女性に、桜の枝といっしょにこの歌を贈りました。花と花の和歌を恋人に贈った、1,300年昔の日本の人たちを想像してみてください。

ストックの産地である淡路島北部の丘陵地域に広がる公園では、5色種・9,000本のストックが特有の香りで人々を楽しませてくれます。(写真提供=あわじ花さじき)



ストック (兵庫・淡路市)

日本水仙三大群生地である越前海岸に咲く水仙は、越前水仙の名称で親しまれ、12月から楽しむことができます。(写真提供=一般社団法人越前町観光連盟)



水仙 (福井・越前町)

富山県西部の砺波市では、毎年春になると都市公園を中心に700品種・300万本が彩る国内最大級チューリップの祭典を楽しむことができます。(写真提供=チューリップ四季彩館)



チューリップ (富山・砺波市)

長野県北部の戸隠高原では、直径5～6mm程の小さな白いそばの花が、まるで白い絨毯のようにあたり一面に広がります。(写真提供=戸隠観光協会)



そばの花 (長野・戸隠高原)

7月

ラベンダー (北海道・中富良野町)



北海道のほぼ中央に位置する富良野では、鮮やかな紫色と心地よい香りが魅力のラベンダーが、北の大地に短い夏の訪れを告げます。(写真提供=ファーム富田)

5月

菜の花 (青森・横浜町)



青森県・下北半島の横浜町では、約150haの丘陵地帯が360度見渡す限り菜の花で埋め尽くされます。(写真提供=横浜町)

8月

向日葵 (新潟・津南町)



新潟県と長野県境の豪雪地帯、津南町では、約4haの台地に広がる向日葵を楽しむことができます。(写真提供=津南町観光協会)

11月

菊 (茨城・笠間市)

茨城県中部にある笠間市では日本で最も古い菊の祭典が行われ、色とりどりの菊の花約1万鉢が、秋の笠間市内を華やかに彩ります。(写真提供=笠間稲荷神社)

10月

キバナコスモス (山梨・山中湖村)



山梨県南東部の山中湖のほとり、標高1,000mの高原にある公園では、世界遺産の富士山を背に咲くキバナコスモスを楽しめます。(写真提供=花の都公園)

6月

紫陽花 (京都・宇治市)

「あじさい寺」とも称される京都・宇治の三室戸寺では、約1.7haの大庭園に50種・1万株の紫陽花が杉木立の間に咲き乱れます。(写真提供=三室戸寺)



3月

梅 (福岡・太宰府市)



福岡県中部に位置する太宰府市にある太宰府天満宮の境内には、「学問の神」菅原道真公が愛した梅の木約6,000本が植えられています。(写真提供=太宰府天満宮)

にっぽん地図めぐり

四季の花をたずねて

南北に長い日本列島では、四季折々に各地でさまざまな花を楽しむことができます。1年中楽しめる花の絶景スポットをご紹介します。

日本国内のどこよりも早く桜が咲く沖縄では、濃いピンク色で釣鐘状の「琉球寒緋桜」という品種が、名護市街を望む斜面を彩ります。(写真提供=名護市観光協会)



寒緋桜 (沖縄・名護市)

1月

季節のおやつ

写真提供・協力：株式会社 虎屋

日本には季節ごとに楽しめる和菓子があります。

お店にならぶ和菓子で

季節の移ろいを感じるといってもいいでしょう。

江戸時代(1603～1867)に始まった、八つの刻(現在の午後2時～4時くらい)に食べる間食の習慣が、現代の日本にも残る「おやつ」です。

江戸時代から今に至るまで、特に人気を極めてきたお菓子のひとつが「桜餅」。春になると、薄く焼いた小麦粉生地であんこを包み、塩漬けにした桜の葉で巻いたものを、その香りとともにいただきます。同じ桜餅でも西の方では生地がもち米になるのが東西食文化のおもしろさです。夏はなんと言ってもかき氷。冬、自然の寒さでゆっくり凍った天然氷をふわふわに削るとおいしいと評判です。さまざまな味のシロップがありますが、宇治金時(抹茶シロップとあんこの組み合わせ)は特におすすめです。

秋は栗。あんこ玉の表面を蜜煮にした栗で覆った栗鹿の子が人気です。冬は小豆を甘く煮た汁に餅を浮かべたお汁粉が恋しくなります。日本ではお正月に神様に餅を供え、1月11日にこの餅を使ってお汁粉にする風習があります。

季節を感じながら楽しめるおやつ。日常のひとときにも彩り豊かな四季の世界が広がります。

夏 Summer



春 Spring



秋 Autumn



冬 Winter



上……………春：桜餅
中央左… 夏：かき氷(宇治金時)
中央右… 秋：栗鹿の子
下……………冬：お汁粉

かん だん さ う あ ざ し き
寒 暖 差 が 生 む 鮮 や か な 四 季

さ つ ぽ ろ
札幌

に ほん ほくたん い ち ほっかいどう さつぽろ ふゆ ゆき たの
日本の北端に位置する北海道の札幌。冬は雪を楽しみに、
なつ ひしょ ち おお かんこうきゃく おとず
夏は避暑地として多くの観光客が訪れる。
さつぽろ き せつ うつ か め はだ した たいげん
札幌の季節の移り変わりを目で、肌で、舌で体験してみよう。



24頁：札幌市時計台 130年以上、札幌の歴史を見守ってきた、札幌の街のシンボル。(写真＝ PIXTA)

25頁 左上：北海道庁旧本庁舎 「赤れんが」の愛称で道民に親しまれる国の重要文化財。

同左下：北海道大学(イチョウ) 札幌駅から徒歩10分ほどの北海道大学の構内にある、イチョウ並木。(写真＝ PIXTA)

同右上：幌見峠ラベンダー畑 札幌市西部の円山公園からほど近い幌見峠はラベンダーの花の甘い香りに包まれる。

同右下：ウィンタースポーツ 札幌には数十分で本格的なウィンタースポーツを楽しめるアクセスのよいスキー場がいくつもある。(写真＝サッポロテイネ)



に ほん おお しま ちい い じょう しま
日本は4つの大きな島と、小さな6,000以上の島の島
らなり、北海道は本州に次ぐ2番目に大きい島だ。冬に
はパウダースノーを目当てに、多くの人が国内外から
ウィンタースポーツを楽しみにやってくる。

つ ゆ 梅雨のないカラッとした夏の北海道は過ごしやす
い。その中心地である札幌は、日本で4番目に人口の多
い都市である。手の届くところに自然がありながら、
と かい べん り たの そな はったつ ち か てつ
都会の便利さや楽しさも備えている。発達した地下鉄、
し でん もう り よう やま うえ こうよう なが
市電、バス網を利用すれば、山の上から紅葉を眺めたり、
みどり だいへいげん しょ か あおぞら まんきつ まち ある
緑の大平原で初夏の青空を満喫したり、街を歩いて
ゆき かんしよく たの に ほん ほか ち あじ
雪の感触を楽しんだり、日本の他の地では味わえない
スケールの大きさを、春夏秋冬の到来を体験できるの
が札幌だ。

さつぽろ ほる みじか はな なが ふゆ め
札幌の春は短い華やかにはじまる。長い冬から目
ざ 覚めると、札幌中心街の東西に走る大通公園には花が
あふれ、北海道庁旧本庁舎はチューリップに彩られる。
6月のYOSAKOIソーラン祭りがやってくると、札幌
はひと夏の夏のおまつりムード一色になる。夏にぜひ
訪れてほしいのが、市街を一望できる幌見峠のラベン
ダー畑。ラベンダーの紫色の絨毯と札幌の街の眺めは
ここでしか見ることができない。世界的彫刻家イサ
ム・ノグチの遺作として有名なモエレ沼公園も夏には
イベントが目白押しだ。

あき さつぽろ いちばん ふうけい み
そして秋。札幌で一番のロマンティックな風景が見
られるのは北海道大学のイチョウ並木だろう。大通公
園西端にある札幌市資料館の裏庭も隠れた紅葉の見
どころである。



さっぽろ雪まつり 市内3カ所で、旬なキャラクターや世界の建造物を巨大雪像にして展示(右上・右下)。雪まつり期間中、世界各地から集ったチームが雪像づくりを競い合う国際雪像コンクールも毎年注目を集めている(左上)。北海道の食が一堂に会する「北海道 食の広場」も見逃せない。(写真＝さっぽろ雪まつり実行委員会・PIXTA)



左：味噌ラーメン 札幌グルメの代表格「札幌ラーメン」。濃厚な味噌が効いた豚骨スープとちぢれた麺が特徴だ。(写真＝すみれ本店)

右：ジンギスカン 中央部が凸型になっている鍋で羊肉を焼くジンギスカンは北海道民のソウルフード。(写真＝サッポロビール園)



上：YOSAKOI ソーラン祭り 6月の札幌の市内各所を踊り子達の舞台へと変えるYOSAKOI ソーラン祭り。(写真＝YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会)

下左：さっぽろテレビ塔と大通公園 一丁目にあるさっぽろテレビ塔から、西へ1.5km先の十二丁目まで続く大通公園は、四季の風景を映し出すステージである。(写真＝さっぽろテレビ塔)

下右：モエレ沼公園 自然とアートが融合した美しい景観だけではなく、桜、水遊び場や噴水、紅葉、クロスカントリースキーやソリと四季折々の魅力も楽しめる。



大通公園にもっとも活気があふれるのは冬である。毎年2月には札幌に国内外から200万人の人々が集まる、「さっぽろ雪まつり」が行われる。1950年、雪捨て場だった大通七丁目で、中高生が雪像をつくったのがこのイベントの始まりと言われている。人気アニメキャラクターから、世界遺産の建築まで、精巧につくられた雪の彫刻が並ぶ様子は圧巻だ。

会場では雪像の見物以外にも楽しみがたくさんある。屋外スケート場やスノーラフティングができる会場、凍えた体を温め、歩きつめて空っぽになったお腹を幸せで満たしてくれる屋台エリアもある。北海道は食においても、全国に知られる名物が多い。

ラーメンならこってりとした味噌スープが北海道らしい。「ジンギスカン」と名づけられた日本独自の羊肉焼肉料理は独特な専用鍋で焼かれる北海道の郷土料理だ。小樽をはじめ北海道各地の漁港から届く新鮮なホタテ、イカ、カニ、カキなどを使った串焼きやスープもある。もちろん北海道ならではの「ざんぎ」(鶏の唐揚げ)も見逃せない。雪まつりは、実は北海道の味が一堂に会するグルメ垂涎のイベントでもあるのだ。

都会と自然の良さをあわせ持つ地、札幌の四季は、食に観光にと楽しみが尽きない。

交通案内

東京国際空港(羽田)から約1時間30分で新千歳空港へ。空港からは快速エアポートで札幌駅まで最速35分、バスで約70分。

問い合わせ

● さっぽろ雪まつり実行委員会

TEL: 011-281-6400

<http://www.snowfes.com/>

● YOSAKOIソーラン祭り実行委員会

TEL: 011-231-4351 FAX: 011-233-4351

<http://www.yosakoi-soran.jp/>



でんとう げんだい ゆうこう
伝統と現代の融合

て 手ぬぐい

写真:PIXTA・アフロ



「手ぬぐい」は「手」を「ぬぐう」という意味の日本に古くから伝
わるタオル。汗をぬぐったり、入浴中に体を洗ったり、頭にか
ぶって日差し除けに使用したりと、さまざまな用途に使える
万能型の布です。素材は吸水性に優れた木綿製がその大半を
占めています。「手ぬぐい」には、シンプルな柄から、アート性
の高い絵画柄のものまで、さまざまなデザインがあり、今で
は、実用のほかに壁に飾って装飾品として楽しむ人も増えて
います。伝統的な柄を選ぶもよし、モダンなポップ柄を選ぶも
よし、手軽でどんな年代の人にも好まれることから、日本のお
土産として最適です。